唯識文献における prabhāṇita の語義

——『中辺分別論釈疏』を中心として——

金 才 權

1 はじめに 唯識文献において ‘-prabhāṇita’ は色々な文脈で用いられる。かつて山口博士や長尾博士は漢訳に基づいてこの語を「顕現せられる」などほとんど同じ意味で捉えている¹⁾。

しかし、L. Schmithausen 博士は S [1969] における注記の中で ‘-prabhāṇita’ の語義を四つに分類し、漢訳のような見解には唯識文献の文脈において何ら根拠も見出せないと指摘している²⁾。さらに博士が ‘-prabhāṇita’ の語義を「is characterized by ; etc.」³⁾ と強調して以来、一般的に「～によって特徴づけられる」などと理解される傾向もあるらしい。袴谷氏も Msg において同様に捉えている⁴⁾。

一方、松本氏は、本来 ‘-prabhāṇita’ は「生み出された」という意味であるが、この語が原意から離れて「～によって定義される」などテクニカル的に用いられていくのはアサンガ以後のことであろうと想定している⁵⁾。

いずれにせよ、従来の見解は L. Schmithausen 博士の四つの分類に含まれるが、それに当てはまらない文脈も MVṬ おいては見出せる。また、漢訳に基づく、理解し難い文脈が少なくない。

したがって、ここでは L. Schmithausen 博士の分類に則って、従来の解釈を踏まえ、MVṬ 文脈を中心にして最も適切な prabhāṇita の意味を考えて見たい。その際、文脈ごとにその意味をどう確定するかということも明らかにしたい。

2 MVṬ における prabhāṇita 実際に MVṬ おいて ‘-prabhāṇita’ という語は 22 箇所で見出されている。それでは L. Schmithausen 博士の分類に則って、MVṬ 用例を検討してみよう。

2.1. (a) ‘erzeugt’ (～から生み出される、発生する)

・資料 [1] : atra ca dravyataḥ ṣaṭ pāramitāḥ nāmato daśa / prajñāpāramitāprabhāṇitatvāc catasṣām pāramitānām / (MVṬY96-97; Pa74)

[試訳] ここに波羅蜜は実体としては六つであり、名称としては十である。[十波羅蜜の中で後の] 四波羅蜜は智波羅蜜より生じたものであるからである。

文脈上、まず上記の **-prabhāvita** の一節は『八千頌般若経』(ASP, ed.Vaidya) に対するハリバドラの註釈に基づいて「～から生じた (nirjāta)」という意味で理解せられる⁶⁾。さらに ASP の他の用例と当該の漢訳によっても、**-prabhāvita** は「～から生じた (nirjāta)」という意味で Ablative Tatpuruṣa として解釈されている⁷⁾。従って、**-prabhāvita** は「～から生じた (nirjāta)」という意味で解釈できる。同様の例は MVṬ [Y163; Pa122 (1)], [Y209; Pa156 (1)] でも確認される。

・資料 [2] : dharmadhātuprativedhaprabhāvitatvād buddhavacanasya / yasmāt sarvākārapariśuddhadharmakāyaśaṃjñakadharmadhātuvaśena *pravartito dharmadhātuniṣyandaḥ sūtrādiko deśanādharmah / dharmadhātuvagratayā tanniṣyandadeśanādharmāgratāyā dharmadhātupariśuddhinimittatvāc ca / (MVṬY101; Pa77) <*pravartito em. (rab tu byung ba 'i phyir roT.): prabhāvito Y.)

[試訳] 仏語は法界を通達することによって生み出されたものであるからである。なぜなら、法界の等流の経などの教法は、一切種において清浄の法身と言われる法界の力によって生じたものであるからである。法界の最勝性の故にそれ(法界)の等流である教法が最勝であるから、及び法界の清浄を因とするからである。

まず **-nimitta** (rgyu) は山口博士によっても因として解釈され、因果関係を連想させる。また、下線を付した部分のチベット訳 *rab tu byung ba* によっても **-prabhāvita** が「生じた」という意味で理解されたことが窺える。文脈的にも buddhavacana 及び deśanādharmā と dharmadhātuprativedha 及び dharmadhātupariśuddhi との間には因果関係が認められる。それ故に **-prabhāvita** は「～によって生起させられた」という意味で解釈できる。同様の例は MVṬ [Y9; Pa9 (1)], [Y134; Pa102 (3)], [Y174; Pa131 (1)], [Y190; Pa143 (1)], [Y247; Pa184 (1)] でも確認される。

2.2. (b) 'manifestiert (durch etwas)' (～によって顕現させられる)

本来、漢訳の「顕現させられる」という意味は、すでにあるもの、あるいは隠れたものが「現われてくる、明らかにされる」というふうに理解せられる。しかし、MVṬ においては漢訳のような解釈が相応しい文脈は見出せない。

2.3. (c) 'bestimmt als' (～として定められる／決定される)

・資料 [3] : *katham idaṃ bodhyaṅgeṣu dṛṣṭidoṣa āvaraṇam ity ata āha, (teṣāṃ) darśanamārgaprabhāvitatvād iti darśanamārgavyavasthāpitatvād ity arthaḥ* / ... (中略) *atraiva kāraṇaṃ āha, teṣāṃ mārgāṅgānāṃ bhāvanāmārgaprabhāvitatvād iti bhāvanāmārgavyavasthāpitatvād* / (MVṬY93)

[試訳] どうして過失が諸覚支(七覚支)に対して障碍であるのか。これに対して、[世親は] 次のように言う。それら(七覚支)は見道として決定されるからであると。見道として確立されるからであるという意味である。... (中略) [世親は] まさにこれについて理由を言う。それら道支は修道として決定されるからであると。修道として確立される

からである [という意味である]。

ここで **-prabhāṇita** は、漢訳では、玄奘は「所顕示」、真谛は「所顕、所顕現」とあり、いずれにせよ、「顕現させられる」という意味で捉えている。しかし、すでに指摘した通り、少なくともこの一節においては漢訳のような解釈は否定されるべきである。なぜなら、安慧はそれを「**-vyavasthāpitatvād**」という意味で註釈しているからである。したがって、**-prabhāṇita** は「～として確立される」という意味で解釈すべきであろう。同様の例は MVṬ [Y92 ; Pa71 (1)], [Y156 ; Pa117 (2)], [Y179 ; Pa134 (1)], [Y194 ; Pa146], [Y180 ; Pa135 (1)] でも確認される。

2.4. (d) (wesentlich) gekennzeichnet durch (etwas)

・資料 [4] : (śūnyatā vidyate tv atra), (1-lc) iti / śūnyatāsvabhāvaṃ hi vyavadānaṃ dvayābhāvasvabhāvatvāt / atra ca śūnyatāprabhāvitatvād māṅganirodhayaṃ api grahaṇaṃ veditavyaṃ / (MVṬY13 ; Bh/T 11 ; Pa 11)

〔試訳〕「しかし空性がここ（非真実の構想）にある」 (1-lc) と、実に清浄は空性を自性とするものである。なぜなら〔所取・能取の〕二つが存在しないことを自性とするからである。また道〔諦〕と滅〔諦〕も、空性によって特徴づけられたものであるから、ここ〔空性〕に包摂されると知られるべきである。

文脈上、点線の下線を付した部分は「B も '**A-prabhāvitatvāt**' という点で A に包摂される」と置き換えられる。そして「B (道諦と滅諦) が A (空性) から生じる」という因果関係の解釈は 'api' という語によって否定される。なぜなら、意味上 'api' という語によって「B」も清浄のように空性を自性とするような側面が見なせるからである。言い換えれば、「どのようにして非真実の構想に属す道諦と滅諦とが空性に包摂されるのかということに対して、それらは清浄と同じく本質的に空性を有しているからである」というふうに理解せられる。つまり「**A-prabhāvitatvāt**」は空性の自性を示しているように理解される。それ故に **-prabhāṇita** は「(本質的に)「～によって特徴づけられる」という意味で解釈できる。同様の例は MVṬ [Y115 ; Pa87 (1)], [Y197 ; Pa148 (1)] でも確認される。

2.5. (e) 異例

・資料 [5] : yady evaṃ bodhisattvānāṃ āvaraṇaṃ na vyavasthāpyate / naitad evaṃ, bodhisattvānāṃ hi śrutasambhāraprabhāvitatvāt teṣāṃ āvaraṇaṃ jñeyāvaraṇaṃ / (MVṬY266 ; Pa52)

〔試訳〕 若し〔無知が〕この〔無明の〕ようであれば、諸菩薩の障碍は確立せられない。〔否〕そのようなことはない。なぜなら諸菩薩にとって、聞の資糧が顕著（強力）であるので、それら〔諸菩薩〕の〔他の境（五明処？）に対する〕障碍は所知障である。

まず L. Schmithausen 博士の四つの分類は文脈上当てはまらない。文脈上、「菩

薩にとって、なぜ障碍が所知障がなのか」を **-prabhāṇita** の一句によって理解せねばならない。意味上 AKBh の用例を採用してみると⁸⁾、**-prabhāṇita** は「顕著だから」という意味で解釈できる。この解釈が妥当かどうかはまだ検討の余地がある。

3 おわりに 以上、L. Schmithausen 博士の分類に則って **-prabhāṇita** の用例を検討してみた。それを纏めると、まず (a) 因果関係が認められる文脈は「～によって生み出された」という意味で解釈される。実際に MVT₁ おいてはこの場合が最も多かった。(b) すでに指摘した通り、MVT₁ おいては漢訳のための何ら根拠も見出せなかった。他の唯識文献も検討の余地はある。(c) 安慧の「-vyavasthāpita」という解釈は「何かが特性などによってそれぞれ分けられて確定・定義される文脈に」適用されうると判断せられる。(d) 「(本質的に) ～によって特徴づけられる」という解釈は、A と B の両関係を存在論的な側面よりは共通の本質的な側面から説明するような場合に適用されうる。一方、(e) 俱舍論の「力が強く、顕著だから」という意味を適用してみたが、このような意味が唯識文献において相応しいかどうかはまだ検討の余地がある。このような問題は今後の課題としたい。

1) 山口益訳 (MVT₁, 1935), p.9ff; 長尾雅人訳, MVBh (1976), p.258.

2) L. Schmithausen, Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Vinīśayasamgrahaṇi der Yogācārabhūmiḥ, Wien. (以下, S [1969]), pp.109f.

3) S [1984], p.436; Cf. S [1969], p.109 f.

4) 袴谷 [2001], 『唯識思想論考』, 大蔵出版, p.311, p.566, p.703.

5) 松本 [2003], 『解深密経』の「唯識」の経文について, p.212f.

6) Cf. ASP, p.18, II. 22-23 : srotāpattiphalaṃ asaṃskṛta prabhāṇitam iti na sthātavyam / : 『現觀莊嚴論光明』 *Abhisamayālaṃkāṛāloka* (AAĀ, p.18, . II .6-7) : asaṃskṛta prabhāṇitam iti tattva-to 'nutpādasvabhāvatvān mārgasyāsaṃskṛtanirjātaṃ phalaṃ kāryam / ; 松本 [2003], pp.207-210.

7) Cf. ASP, p.231f : ye 'pi te ānanda atite 'dhvany abhūvaṃs tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ, te 'py ānanda ita eva prajñāpāramitātaḥ prabhāṇitāḥ / ; 羅什訳, 『小品般若経』(大正 8,578c12) : 「阿難, 過去諸仏, 皆從般若波羅蜜出」; 同訳, 『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』(大正 8, 666a14) : 「阿難, 過去諸仏如来応供正等正覚, 皆從般若波羅蜜出生」

8) Cf. [Akbh354, S/O (1999) 193] śraddhāprajñādhikātenādhimokṣa dr̥ṣṭiprabhāṇitavāt / [Akbh384, S/O (1999) 435] gamanaprabhāṇitavād darśanamārge mārgāṅgāni, tasyāśugāmitvāt /

〈キーワード〉 Prabhāṇita, 顕現, 『中辺分別論』, 生起, 唯識文献

(龍大大学院)

and *saṃvarta* in commentaries of the DBhV. Furthermore, misinterpretations of *vivarta* and *saṃvarta* can be seen in current studies of the Six Characteristics due to a use of both versions but a lack of consideration regarding the aforementioned transfiguration.

172. On āgama in the *Yogācārabhūmi*

AZAMI Noriaki

The aim of this paper is to study canonical verses in the *Yogācārabhūmi*. The Cintāmayī Bhūmi is the eleventh chapter of *Yogācārabhūmi*, which is composed of three parts, *Paramārthagāthā*, *Abhiprāyikārthagāthā*, and *Śarīrārthagāthā*. Prof. Enomoto studied the *Śarīrārthagāthā* in his treatise [1989]. I study one of the canonical verses (*gāthā*) in *Śarīrārthagāthā*. This research can help us understand the relationship between the *Yogācārabhūmi* and other sūtras.

173. The Term ‘*prabhāvita*’ in Yogācāra Texts, with special reference to the *Madhyāntavibhagaṭīkā*

KIM Jae-gweon

The term ‘*prabhāvita*’ is used in various contexts in Yogācāra works. Following the Chinese translation, it is taken by S. Yamaguchi and G. Nagao to mean ‘made manifest’. However, L. Schmithausen has shown that the Chinese understanding of the term is not justified by Indian Yogācāra texts. Accordingly, Schmithausen has delineated four distinct usages of *prabhāvita*. On the other hand, S. Matsumoto later maintained the meaning of the term as ‘be produced from’. Investigation by other scholars has confirmed Schmithausen’s analysis, with those occurrences studied falling within Schmithausen’s fourfold delineation. However, the *Madhyāntavibhagaṭīkā* uses the term in various contexts which may fail to conform to the senses outlined by Schmithausen. Accordingly, this paper attempts to determine which sense of *prabhāvita* may be applicable in each of these contexts in the light of Schmithausen’s fourfold delineation, as well as taking into account previous research. From this, it will be argued that some instances of the

term may be identified as failing to conform to Schmithausen's typology. It is hoped also that this present paper may foreshadow further investigation into whether the Yogācārin understanding of *prabhāvita* accords with its usage in the *Abhidharmakośabhāṣyam* in the sense of 'prominent'.

174. *khyātivijñāna* in the *Laṅkāvatārasūtra*

CHUNG Yu-shik

The term *khyātivijñāna* as used in the *Laṅkāvatārasūtra* has generally been interpreted as corresponding to the first five *vijñānas*. However, there is unfortunately no reliable evidence for the above interpretation. In addition, according to my inquiry into the usage of this word and its related term *vastuprativikalpa-vijñāna*, the word *khyātivijñāna* in a certain context of the second chapter of the *Laṅkāvatārasūtra* may most probably be interpreted as meaning the seven *pravṛttivijñānas*. Therefore, further research should be centered on the exact meanings of, and relationship between, the both terms, *vastuprativikalpavijñāna* and *khyātivijñāna*.

175. The Argument from Illusion in Buddhist Idealism

KOBAYASHI Hisayasu

Any object that a cognition cognizes exists in the external world; or, any object that a cognition cognizes does not exist in the external world. These are the alternatives Prajñākaragupta gives in his *Alaṃkāra*. Buddhist idealists use an illusory cognition, such as a dream cognition, as an example to illustrate the latter. But can we conclude, from the fact that such an illusory cognition cognizes an object which does not externally exist, that any cognition has no externally existent object? This is the problem of generalization Matilal (1972) pointed out concerning the "Argument from Illusion" of Buddhist idealists. Prajñākaragupta tries to solve this kind of problem from the viewpoint of the theory of self-cognition (*svaśamvedana*), showing that the problem can be solved by Buddhist idealists, but not by realists.

Kumāṛila, a typical realist, holds that it is what exists in the external world that brings about an illusory cognition. For example, in the case of the mi-